愛知工業大学研究報告
第 46 号　平成 23 年

『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語

Japanese Loanwords That Appear in Both Kæmpfer's *the History of Japan* and *the Oxford English Dictionary*

土居 峻 *
Schun Doi

Abstract:

In my earlier paper of 2010, published in the book *the Future of English Studies*, I have mentioned of 74 words of Japanese origin that could be found in both *the History of Japan* and *the Oxford English Dictionary*. However, it was not possible to list those words in that paper due to spatial limitations. Thus, I will here publish the list, together with some explanations for each of the Japanese loanwords. After briefly reviewing the two sources so that readers who are not familiar with these sources will be able to know what they are, the list of the 74 words will be given in alphabetical order.

１．はじめに

拙稿（2010: 92）において、E. Kæmpfer 著『日本誌』*the History of Japan* 及び『オックスフォード英語辞典』*the Oxford English Dictionary*（以下、OED と略記する）の双方に見られる日本語は 74 語あることを指摘した。しかし、ページ数や書式の制約のため、それら 74 語の一覧を掲載することができなかった。そこでここに、その 74 語の各々について簡単に説明・解説を加えながら、その一覧を掲げる。

２．『日本誌』及び OED について

その前に、まず、本稿の対象である『日本誌』及び OED について簡単に見ておく。

OED に関しては、今更の感もあるが、知らぬ人もあるかもしれないので、念のために概要を述べておく。OED の初版は 1928 年にオックスフォード大学出版局（Oxford University Press）より刊行された。1933 年（*Suppl. 1*）、1972 年～1986 年（*Suppl. 2*）と 2 度に亙って補遺版が出版され、それらをまとめて第 2 版が 1989 年に同出版局より出されている。

その後、3 巻の新補遺 *Additions Series*（第 1 巻・第 2 巻が 1993 年刊、第 3 巻が 1997 年刊）が出されているが、オンライン版が 2000 年に始まったことに伴い、新補遺の出版はされなくなっている。代わりに、3 ヶ月ごとにオンライン版の改訂が行われている。新補遺及びオンライン改訂原稿の公開は、現在進行中である第 3 版に向けての改訂作業の一環であると聞いているが、出版予定については明らかでない。

第 2 版は全 20 巻の巨大な辞典であり、300,000 余りの親見出し語があり、その下に 2,437,000 以上の例文が挙げられている（Berg 1993: 195）。語義及び例文は年代順に並べられており、その変遷がたどれる「歴史的原理」に従って編纂されている。今回使用したのは、この第 2 版の CD-ROM 版（2002）であり、これには *Additions Series* も含まれている。

一方、『日本誌』はあまり馴染みのない文献だろう。この本はドイツ人であるエンゲルベルト・ケンペル（1651～1716）が 18 世紀に著した日本についての書物である。ケンペルは長崎出島のオランダ商館勤務の外科医としてオランダ東インド会社に採用され、39 歳で来日した。滞在期間は 1690 年 9 月から 1692 年 9 月までである。日本滞在中には商館長に伴って江戸へ 2 回参府し、当時の将軍であった綱吉にも拝謁している。『日本誌』はこの日本滞在中に知り得た日本に関するあらゆる情報に、紀行日誌などを加えた総合的な‘日本情報本’となっている。

その原稿は手書きで残され、ドイツ語で書かれていた。『日本誌』の内表紙に“written in High Dutch”と記されている通りである。ここでの High Dutch というのは High

*　愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

German と同義であり、標準ドイツ語のことである（拙稿 2010: 97, n8 参照）。ケンペルが残したこの原稿は、生前には出版されることなく、彼の遺産相続人たる甥はその手稿をそのままイギリス人に売却した。このイギリス人はこれをすぐにスローン卿に転売する。スローン卿はロンドン市中に開業していたショイヒツァー医師に全文の翻訳を委ねた。こうして、その手稿はケンペルの死後 11 年経ってからロンドンにおいて英語で出版されることになるのである。

『日本誌』は、その後のヨーロッパにおいて日本に関する基本的な情報を得るために有用な書物の代表格として多くの言語に翻訳され、使用された。ツンベルクやシーボルトが著した日本に関するの著作にも『日本誌』の影響が色濃く見られると言われている（早川 2003）。また、この 2 巻からなる大作は、OED に多くの例文を提供しており、大きな影響を与えている（大和田 1995, 1997）。

３.『日本誌』と OED との双方に現れる日本語

第 1 節でも述べた通り、双方に現れる日本語は 74 語である。以下、これらの 74 語をアルファベット順に見ていく。なお、項タイトル中、括弧の中が OED の綴り、外が『日本誌』における綴りである。

３・１　Adsuki (adzuki)

小豆。言わずと知れたマメ科インゲン属の栽培植物である。中国大陸及び日本の原産とされ、食用にする習慣は古くからある。赤飯や料理に用いられる他、餡に加工され、和菓子の重要な材料にもなる。大納言や白小豆はアズキの栽培品種である。

『日本誌』でも OED でも、綴りが現在の発音に基づくローマ字 azuki ではなく adsuki/adzuki となっている。しかし、これをもって発音の「英語化」とは言えない。むしろ、その逆であり、日本語の発音を表記しようとした結果であろう。実際、小豆を歴史的仮名遣いで書けば「あづき」であり、少し前まではそのように発音していた筈なのである。そうであれば、zu でなく dsu/dzu となるのも頷けるだろう。

OED の初版には採録されていない語のようであるが、第 2 版には 9 つの用例を伴って載っている。定義は「中国や日本で栽培されるマメ科の一年草で、学名 *Vigna angularis*。暗褐色の食用豆並びにその植物」、また、「adzuki bean の形で限定詞的にも」となっている。異形として atsuki, adsuki, azuki の 3 つを挙げている。初出例は 1727 年、今回見ている『日本誌』から“Adsuki, or Sodsu, that is Sobeans.”［アズキあるいはショウズ、すなわちショウ豆。］である。『日本誌』には 2 場面に登場し、まずは日本の農作物を説明する際に（上例の他にも数例あり）、そして草餅の中の餡を説明する際に出現している。

なお、この語は OALD[8] にも adzuki (also adzuki bean, aduki) “a type of small round dark red bean that you can eat”と載っている。日本語借用語の中では比較的定着しているのではなかろうか。

３・２　Awabi (awabi)

鮑。ミミガイ科アワビ属の巻貝の総称である。日本や朝鮮半島、中国で広く漁獲され、肉は高級食材、殻は貝細工の材料となる。古来、熨斗鮑は貴人への献上品や祭神への供物として尊重された。日本産のアワビにはクロアワビ・マダカアワビ・メガイアワビの 3 種がいるが、漁獲量の最も多いのはクロアワビである。

OED に採録されたのは *Suppl. 2* からであり、その時の用例は 4 例である。これは第 2 版にそのまま引き継がれているという。初出例は 1889 年の *Century Dict.*に収録されているものとなっているが、辞書に記載があるということは、それ以前の何れかの時点で使われた例があると考えるのが自然である。早川（2007: 173）によれば、1616 年の *Diary of Richard Cocks* から、“woby”というのがこの語の初出ではないかとのことである。1727 年の『日本誌』はこれよりは新しいが、*Century Dictionary* よりは古いことになる。

OED の定義文は「日本のアワビ、学名 *Haliotis gigantea*」となっているが、この学名はメガイアワビのものである。前述の通り、漁獲高が最も多いのはクロアワビ *H. discus* である。ちなみに、マダカアワビの学名は *H. madaka* である。日本人の命名であろうか、この学名は日本語そのままである。

『日本誌』では 3 場面に登場する。日本の海産物を紹介する場面に“There is another Shell, which sometimes yields Pearls, found plentifully upon all the Japanese Coasts, and call’d by the Natives *Awabi*.”［もう 1 種の貝類があり、真珠をたまに産するものだが、これは日本全国の沿岸に多く見られる。この貝は現地の人々にアワビと呼ばれている。］などとある。また、熨斗鮑の説明に出ている他、図版の説明に 1 ヶ所ある。

３・３　Bon (Bon)

盆。物を載せて運ぶお盆ではなく、仏事の盂蘭盆のことである。盂蘭盆はサンスクリット語 *ullambana* の音写であり、もとは 7 世紀に宮中の正式行事として中国から伝来したものという。現在の盂蘭盆の行事は、鎌倉時代に世俗化し、施餓鬼が併せ行われるようになったものに、民間の

祖霊信仰が融合し、江戸時代に確立した。一般には「お盆」と称されることが殆んどである。7 月 15 日を中心に、祖先の霊に食物を供え、餓鬼に施し、その苦しみを救う行事とされる。新暦・旧暦・月遅れなど、その土地の習慣によって日が異なっているが、今では 8 月中旬のお盆休みの頃を思い浮かべる人が多いだろう。

東京成徳英語研究会（2003）に掲載されていることからもわかる通り、OED には *Additions Series* で初めて採録された。「敬意を示す接頭辞 *o*-を付けて O-Bon とすることもある」とし、「日本の仏教の祭りで、死者を称えるために毎年 8 月に行われる。死者の祭り、また、燈籠祭り」と定義されている。用例は次に挙げる参考例を含めて 6 例ある。

初出の出典は“**1617** R. Cocks *Diary* 5 Aug. (1883) I. 292”となっており、これは R. Cocks の日記の 1617 年 8 月 5 日の記述に登場しており、1883 年に出版されたものの第 1 章 292 ページに当該文があることを示している。しかし、この例文は全体が括弧[　]で囲まれており、これは参考例であることを示す。その例文とは “This night began the feast of *bonbon*, or for the dead, with hanging out of candell light, and enviting the dead, etc.”［今宵よりボンボンの祭り、つまり死者のための祭りが始まった。堤燈をさげ、死者を招き、云々］であり、確かに見出し語とは異なっているものの、説明からすると「お盆」であることには違いないだろう。

明確にこの語の例であるとわかる用例は、小泉八雲『霊の日本』（1899）より“The time of the Bon—the great Festival of the Dead,—which begins upon the thirteenth day of the seventh month.”［盆――死者の大祭――の時期は 7 月 13 日に始まる。］が初例であり、これは 1727 年の『日本誌』よりもずっと新しい。『日本誌』には長崎の年中行事を紹介している場面で、次のように 1 回使われている。“On the 8th of *August*, there was another festival call'd *Bon*.”［8 月 8 日には、盆と呼ばれるもう一つの祭りが行われた。］

３・４　Bonze, Bonsey (bonze)

坊主。仏教の僧侶であり、僧坊の主の意味である。つまり、禅宗における住持であり、俗に言う住職のこと。また、『日葡辞典』に bonzo〈凡僧〉、Curainaqi iyaxiqi so〈位なき卑しき僧〉とあるように、OED に取り上げられた bonze も原義は「政治の表舞台にも裏舞台にも関係しない単なる出家者」である可能性も考えられる（東京成徳英語研究会 2004: 18）。

OED には初版から取り上げられている。第 2 版の定義では「日本、また、時に中国やその近隣国の仏教の僧侶に対してヨーロッパ人が使った用語」となっており、幾つかの異形とともに掲載されている。初出は参考例となっており、“Erubescunt enim et confunduntur Bonzii.”［坊主どもは、確かに赤面し、しどろもどろになってしまった。］である。これはラテン語で書かれた一節であるが、ヨーロッパにおける初出ということであろうか。イエズス会宣教師として来日したザヴィエルによって記された 1552 年の報告書からの引用である。OED 第 2 版にはこれを含め、9 例が載っている。

第 2 例は“**1588** Parke *Hist. China* 379 (Y.) They haue amongst them [in Japan] many priests of their Idols whom they do call Bonsos, of the which there be great couents.”［日本人の中には偶像を祀るための、彼らが凡僧と呼んでいる聖職者が大勢おり、凡僧らは大集団を成しているようだ。］であり、これが実質的な初出例であることになる。

『日本誌』では、宗教に関して書かれた部分や歴史に関する部分 3 ヶ所にある。例えば次の通りである。“The new converted Christians [. . .] carried [. . .] their hatred against the Pagan worship, and its Bonzes or Priests, so far, as to pull down their Temples and Idols.”（省略は筆者による）［新たに改宗したキリスト教徒は、異教徒の信仰や彼らの坊主や僧に対する憎しみを持ち、寺や仏像を破壊したほどである。］

なお、この語は Serjeantson（1935: 239）で OED に見られる最も古い日本語からの借用語として紹介されている（彼女は実質的な初出である 1588 年を紹介している）が、第 2 版を確認すると 1577 年初出の Kuge（公家）のほうが幾分か早いことがわかった。この差異は、彼女が初版を使っていることによる思われる。また、この語は日本語から直接借用されたものではなく、参考例や『日葡辞典』への採録からもわかる通り、ラテン語やポルトガル語を経由していることにも注目しなければならない。

３・５　Cango (kago)

駕籠。一本の長柄の中央に、竹製や木製の人が乗る部分を吊るし、前後から担いで運ぶ乗り物のことである。江戸時代には、竹組みの粗製のものを「駕籠」、一部の上流階級の者が使う特製のものを「乗物（のりもの）」と呼んで区別したらしい。OED でも norimon がこれと別に立項されており、『日本誌』でも Cango と Norimon とは使い分けられている。

OED では初版から登場し、その定義は「一本の棒に吊るしたかご細工からなる日本の palanquin で、担ぎ人夫の肩に乗せて運ばれる」となっている。palanquin とは、インド亜大陸で使われている一人乗りの駕籠である。異綴り

として cango が挙げられており、例文としては採録されていないが、これは明らかに『日本誌』を念頭に置いた記載である。しかし、実際に採録されている初出例は“**1857** R. Tomes *Amer. in Japan* viii. 191 That horses, kagos, and kago-bearers, should be in readiness.”［馬も、駕籠も、担ぎ人夫も、いつでも出発できるようにしていなければならないこと。］であり、『日本誌』よりもかなり新しいという矛盾を起こしている。OED の用例はこれを含めて 3 例である。

『日本誌』においては、長崎・江戸間の 2 往復を題材に書かれた旅行記の部分に何度も出現している語である。その使用例を 1 つ挙げれば、“After dinner we set out again in *Cangos*, because of the neighbouring hills and mountains, we were now to travel over, and which are not easily to be pass’d on horseback.”［食事後、我々は再び駕籠で出発した。駕籠に乗るのは、これから越えなければならない近隣の丘や山のためであり、その起伏を馬に乗って越えるのには困難が伴うからである。］といった風である。第 2 節でも書いた通り、ケンペルはオランダ長崎商館の長官と共に参府しており、その旅程には徒歩だけではなく、馬や駕籠・乗物、船・舟など、多くの乗り物を使っているのである。

『日本誌』の綴りでは、g の前に n が入っている。これは、日本語における鼻濁音を表記上に表そうとしたものであると思われる。

３・６　Cobang, Cobanj, Copang, Kobani, Kobanj, Koobang, Cubang (kobang)

小判。江戸時代を中心に、日本で使われた金貨の一種である。1 枚 1 両を建て前とし、金貨の基準となる計数貨幣である。それ以前にも類似のものはあったようだが、全国に公式の貨幣として流通した小判は、徳川家康が 1601 年頃、後藤庄三郎光次に鋳造を命じたものが始めであり、これは慶長小判と呼ばれている。その後、1860 年に発行された万延小判までの 10 種（慶長・元禄・宝永・正徳・享保・元文・文政・天保・安政・万延）が発行されたが、改鋳の度に量目も品位も低下していった。ちなみに、「新貨条例」（明治 4 年太政官布告第 267 号）が施行された時、万延小判 1 枚と壹圓金貨 1 枚とは等価とされたが、これは金の含有量がほぼ同じであったからだという。

OED には初版から登場し、その後の改訂もない。「以前日本で流通していた角の丸い長方形の金貨。当初の重量は 222 グレーンであったが、後に不利な交換レートのために約 4 分の 1 まで減ぜられた」また、「古い用法では限定詞的に coban gold とも」となっている。「角の丸い長方形」とは即ち楕円形のことであり、222 グレーンはメートル法に換算すると約 14 グラムである。初期の小判は約 18 グラム、1736 年の元文・1819 年の文政が約 13 グラム、1837 年の天宝が約 11 グラム、1859 年の安政が約 9.0 グラム、1860 年の万延が約 3.3 グラムであるというから、OED の定義は元文・文政の頃と万延小判との重量を挙げていることになろうか。万延小判が極端に小さいのは、OED の定義にある通り、外国の交換レートと国内の相場との違いのため、金が国外に大量に流出したためである。

OED の用例は 4 例で、初出例は“**1616** Cocks *Diary* 17 Sept. (1883) I. 176, I receved two bars Coban gould with ten ichibos, of 4 to a coban.”［私は 2 枚の小判とともに一分金 10 枚を受け取った。一分金は 4 枚で小判 1 枚に相当する。］である。これは、coban の使用例であると同時に、小判と一分金との関係も示している。当時の貨幣制度は、4 朱で 1 分、4 分で 1 両の 4 進法であった。一分金も OED の見出し語になっており、『日本誌』でも多く登場する語である。

『日本誌』では、これも旅行記の部分に幾度となく登場する語であり、和訳する際に「小判何枚」というよりも「何両」と訳した方がすっきりする場合もある。また、その他の場面でも、物の値段を述べる際の基本単位として多く用いられている。例えば、“The *Nightingales*, if they have a good voice, are sold sometimes to curious People for twenty Cobangs a piece.”［ウグイスは、良い声で鳴くものであれば、物好きな人々に 1 羽 20 両で売られることもある。］のようである。

OED ではカ行音を表すのに概ね k が使われているが、『日本誌』では c のほうが優勢である。これは、Cobang (kobang)に限らず、前項の Cango (kago)など、他の語でも同様である。ドイツ語表記からの影響も考えられるが、この点についてはまだ勉強不足でよくわからない。

なお、ローマ字にすると綴りは同じだが、発音は少し違う koban（交番）も今では英語となっている。この語が江戸時代に書かれた『日本誌』に出る筈はなく、また、OED にも取り上げられていない。しかし、アメリカでは 1987 年にサンフランシスコに交番が設置され、その名称も koban である（エバンズ 1990: 116）。1994 年には首都ワシントンにも設置され、アメリカ全土に広がりつつあるという（加藤・熊倉 1999: 74）。このようにして、この「交番」も英語になった日本語として定着しつつある。

３・７　Daimio, Dai Mio (daimio)

大名。江戸時代の武士で、将軍の直臣のうち知行が 1 万石以上の者のことである。徳川将軍家との親近度によって親藩・譜代・外様の 3 つに分類されるのは日本史の常識である。一方、知行 1 万石未満の直臣は、直接将軍に会える

旗本が最も有名である。その旗本を含めて知行 1 万石未満の直臣を総称して小名（しょうみょう）と呼んだらしい。こちらは OED の見出し語にはなっていないが、例文中には現れている（例文中にのみ現れる日本語借用語に関しては拙稿（2008）を参照）。百科事典にも情報がなく、「小名」の字で良いのかも不明であるが、『日本誌』には“*Dai Mio* are Lords of the first rank, or Princes of the Empire, and *Sio Mio* all other Lords of an inferior rank”［大名は最上級の貴族、つまり帝国貴族であり、小名はそれより下級の貴族の総称である。］などとある。

OED には初版から収録されており、定義も 2 つの用例もそのまま第 2 版に引き継がれている。その定義は「日本の地域的な貴族の称号で、帝の家臣。今は廃止されている」である。本来、大名は将軍家との主従関係にあり、帝の家臣というのは誤り。しかし、幕府が武家統制の手段として各武家の家格を定め、それに応じて武家官位を与えていたことを考えると、それを知らぬヨーロッパ人が諸大名を天皇の家臣と勘違いしたことは理解できる。武家官位の事実上の叙任権者は将軍であるが、その官位としての性格上、天皇が叙位・任官する形式をとっているのである。

OED の初出は『日本誌』よりも新しいものが挙げられており、“**1839** *Penny Cycl.* XIII. 94/1 The nobility or hereditary governors of the provinces and districts are called *Daimio*, or High-named, and *Siomio*, or Well-named.”［諸国や各地方の貴族あるいは世襲的統治者は大名や小名と呼ばれる。］となっている。百科事典にある日本に関する記事であるが、何の項目であるかはわからない。大名・小名を訳出する苦心の跡が見られる。『日本誌』においては、日本の統治機構を説明する場面で登場する他、大名屋敷の描写や紀行文中で出会った人物の説明などに現れている。

OED には派生語として daimiate, daimioate, daimiote が載っている。これらは 3 語に見えるが、実は 1 つの語の異形である。この語は「大名の領地や役所」と定義されている。この派生語の用例は 3 例挙げられており、初例は“**1870** *Pall Mall G.* 26 Aug. 4 Japanese students..from all parts of the empire, from the inland daimiotes as well as from the sea-coasts.”［内陸の大名領からも、沿海地域からも、帝国の至る所からやって来る日本人学生。］である。文中にある「..」は OED 独特の省略符であり、一般に書く「...」と同じ意味である。限られたスペースにできる限り多くの情報を掲載するための工夫であろう。

３・８　Dairi (dairi)

内裏。本義は、天皇の居住空間としての宮殿のことである。旧来は都の中央北端に位置し、役所の集まる大内裏の中にあった。この都とは、OED においても『日本誌』においても、平安京のことになる。現在の皇居は江戸城の名残であり、東京はそもそも都として設計されているわけではないので、大内裏は存在せず、よって、内裏と言うものもない。

OED には初版からあり、「日本で、本来は帝の宮殿または宮廷。また、帝や皇に用いる尊称。よって、dairi-sama は、字義上は内裏または宮殿の君主で、帝の通称。」となっている。現在では、通常「天皇」と呼び、敬称は「陛下」、呼びかけの際にも「陛下」を用いるが、江戸時代中期や OED 初版編纂の頃には「内裏」「内裏様」と言っていたのだろうか。ちなみに、皇族の敬称は「皇室典範」（戦前は明治 22 年皇室典範、戦後は昭和 22 年法律第 3 号）に規定されている。

用例は 2 例しか掲載されていない。初めの例は、“**1662** J. Davies tr. *Mandelslo's Trav. E. Ind.* 184 That great State hath always been govern'd by a Monarch, whom, in their Language they call *Dayro*.”［その大国は常に君主によって統治されてきたが、この君主を彼らの言語で内裏と呼ぶ。］である。dayro というのは、当時の発音が実際にそうであったのか、聞き間違え・書き間違えや写し間違えであるのかははっきりしないが、OED では異形として挙げられている。2 つ目の例は、“**1780** *Phil. Trans.* LXX. App. 7 We were not allowed to see the Dairi, or ecclesiastical emperor.”［我々は内裏、つまり精神的皇帝に拝謁することを許されなかった。］である。『日本誌』においてもそうであるが、この時代の文献では、天皇を ecclesiastical［精神的］、将軍を secular［世俗的］とし、皇帝が 2 人いるように描写されることがある。OED に dairi-sama の例文はない。

『日本誌』では国政のあり方、都の描写、出会った人物の説明などに多く現れている。その他にも、例えば、次のような例がある。“Even the palaces of the *Dairi*, or Ecclesiastical hereditary Emperor, those of the Secular Monarch, and of all the princes and lords of the Empire, are not above one story high.”［内裏、つまり精神的世襲皇帝の宮殿、世俗的皇帝や帝国の全ての貴族や領主の宮殿でさえ、1 階建てより高いものはない。］

３・９　Finoki (hinoki)

檜。ヒノキ科ヒノキ属の常緑針葉高木で、人工林として多く植樹されている。日本と台湾とにのみ分布し、北限は福島県あたりである。材木は高級建材の他、家具・船舶・彫刻などにも重用され、樹皮も檜皮葺の材料として使われる。春には花粉を多く飛散させ、スギと共に花粉症の主原因となる樹木の 1 つである。

OED には *Suppl. 2* から登場しているという。語義は、「日本産の巨大な針葉樹で、学名 *Chamæcyparis obtusa*。あるいは、その材木」とある。また、finoki の異形も示しているが、これは下の例にも見る『日本誌』における綴りである。

例文は 6 例が掲載されている。その初出例は“**1727** J. G. Scheuchzer tr. *Kæmpfer's Hist. Japan* I. i. 118 *Finoki* and *Suggi* are two sorts of Cypress-trees, yielding a beautiful light whitish wood.”［ヒノキとスギとはヒノキ科樹木の 2 種であるが、これらからは美しい淡黄色の材木が得られる。］で、これは今回見ている『日本誌』からの引用である。ここで出典情報の読み方をおさらいしておくと、この例文の場合、「1727 年刊、J. G.ショイヒツァー訳によるケンペル『日本誌』より、第 1 部第 1 章 118 ページ」を開けば、当該例の前後文脈も含めて読むことができるということである。

ケンペルは『日本誌』において、この Finoki や次項の Firo Canna を始めとして、Fammo（鱧）や Fokekio（法華経）、Nifon（日本）など、日本語のハ行音を fa, fi, fu, fe, fo を使って書き表している。これは情報源となった特定の通詞の癖なのか、17～18 世紀の長崎地方の方言によるものか、当時の日本語が全体的にそのようであったのかは不明であるが、いずれにしてもケンペルが聞いた日本語の発音をできる限り忠実に書き表そうとしたものであると考えて良いだろう。

３・10　Firo Canna (hiragana)

平仮名。日本語を表記するのに用いられる音節文字の一種で、漢字を極度に草体化したものを起源とする。貴族社会における平仮名は一般的には私的な場かあるいは女性によって用いられるものとされ、女手（おんなで）とも呼ばれた。元は多くの異字体が存在したが、時代が下るにつれて字体は整理され、現在は一音一字の原則に従って「小学校令施行規則」（明治 33 年文部省令第 14 号）第一号表に示された 48 種の字体だけが普及している。通常、漢字で書かれる漢語や片仮名で書かれる外来語に対して、大和言葉が平仮名で書かれる。

OED では *Suppl. 1* から採録され、「中国の表意文字の草体に由来する日本の音節文字の筆記体。女性による使用を意図している。片仮名の項も参照」とある。「中国の表意文字」というのは漢字のことである。「筆記体」としたのは、その成立過程を述べているのであろうか。それとも、片仮名との対比であろうか。古来、女手と呼ばれたこともある平仮名であるから、「女性による使用を意図したもの」という記述は全くの誤りというわけではないだろうが、現状を考えると誤解を生みかねない記述でもある。「片仮名」については、別項で取り上げることになるので、ここでは割愛する。

OED には例文が 8 例載っており、その初出例は“**1822** F. Shoberl tr. *Titsingh's Illustr. Japan* 122 These two kinds of poems are composed in *firokanna*, or women's writing.”［これら 2 種類の詩は女性の書体である平仮名で書かれている。］になっている。出典をあたっている訳ではないので、詳細は不明だが、「これら 2 種類の詩」というのは短歌と俳句のことであろうか。『日本誌』では、日本の文字を図示した図版の説明書きに出ている 1 回限りである。それでも、この書籍に出現する日本語であることには違いないのである。

なお、この語は OALD[8] にも載っており、hiragana “a set of symbols used in Japanese writing”とされている。アズキと比べて、どちらがより定着しているのかはわからないが、日本語借用語の中では比較的定着しているのかもしれない。

３・11　Goradzi (Rōjū)

老中は江戸幕府の役職の名である。将軍に直属し、政務を統括した役職である。2 万 5,000 石以上の譜代大名から任命され、定員は 4～5 名であった。常任の役職としては最高職で、その上の大老は緊急時に置かれる臨時の役職である。『日本誌』における表記は「御老中」のことと思われ、これはケンペルの情報源であった通詞がこの語に常に「御」を冠していたことの現れであろう。ちなみに、江戸時代中に書かれた文章はその多くが「御老中」の形を取っているようである。

OED の見出し綴りに標準アルファベット文字（ASCII 文字）以外の文字を含んでいる数少ない日本語うちの 1 つである。つまり、o と u とにマクロン（長音符 ¯）が付されている。何故、他の語の長音にはマクロンがなく、ここにだけあるのかは不明である。

OED には *Suppl. 2* から掲載されており、その語義は「徳川治世（1603～1867）における日本の高級参議あるいは高級大臣」である。“Rōchū, rōjiu, rōjū, etc.”の異形と共に、6 つの用例が挙げられている。

初出例は“**1874** F. O. Adams *Hist. Japan* I. i. x. 71 The successors of Jyéyaŭ..were mostly *fainéants*, as were their almost hereditary ministers, the rôjiu.”［家康の後継者たちは、殆んどが無為の輩であった。老中、すなわち、世襲に近い彼らの参議らと同じように。］である。ローマ字における符号の使い方に、日本語の音声を書き表すのに腐心した跡が見られる。

『日本誌』においては、この語は 1 回だけ使われており、それは江戸において会うべき人々の一覧の中である。その

1 回というのは、“The ministers of state, and other great men at court, some of whom we were only to visit, and to make presents to others, were the five chief Imperial councellors of state, call'd *Goradzi*, or the five elderly men, [. . .].”［会見するだけでよい相手も、贈り物を渡さなければならない相手もいるのだが、我々がお目通りすることになっている国の大臣や幕府における他の貴人には、次の方々がいる。まずは、御老中（つまり 5 人の長老）と呼ばれる 5 人の主任参議官、そして、……。］である。ケンペルは同音である「御」と「五」とを混同し、「御老中」を「5 人の長老」のことであると考えたものと思われる。実際に老中は 5 人いたというのであるから、無理もないことである。

３・12　Itzebo, Itzebe, Itzebi (itzebu, itzeboo)

一分。「一分金」は、江戸時代の計数貨幣（金貨）の名称である。3･6 項の「小判」の所でも述べたが、当時の貨幣制度は 1 両 = 4 分 = 16 朱 の 4 進法であった。江戸時代を通じて、小判と共に鋳造され、品位は小判と同等で、量目は小判の 4 分の 1 である。江戸後期には、等価の額面表記銀貨である一分銀が発行され、一分金の発行高は少なくなった。

OED には初版から採録されており、第 2 版でも定義・用例ともに変わりなく掲載されている。その定義は、以下の通りである。「4 分の 1 を意味する日本語のフレーズであり、通常 1871 年以前に流通した角の丸く、薄い長方形の銀貨を指す。1 両の 4 分の 1 で、英貨にして 1 シリング 4 ペンスとほぼ等価である。」シリングは英貨の補助単位で、1 ポンド = 20 シリング = 240 ペンス であったが、Decimal Currency Acts 1967 (c. 47) and 1969 (c. 19)により 1971 年 2 月をもって廃止され、現行の 1 ポンド = 100 ペンス に改められた。なお、1 シリング硬貨は 1990 年頃まで、廃止前と同等の価値（20 分の 1 ポンド）である 5 新ペンスとして流通した。

OED には 4 つの例文が載っている。しかし、そのうちの 3 例は出典だけしか掲載されておらず、その内容を確認することはできない。初出例は“**1616** R. Cocks *Diary* (Hakl. Soc.) I. 176”、第 2 例が“**1618** *Ibid.* II. 77”であり、第 3 例は“**1868** E. Seyd *Bullion & For. Exchanges* 265”となっている。唯一、本文が載せられている第 4 例は“**1900** Satow *Voy. Capt. Saris* 97 note, The Japanese coin called *ichibu*..mentioned in Cocks's *Diary*..was the gold coin..not the silver *ichibu*, which was first issued in 1837.”［コックスの日記に書かれている日本の貨幣の一分は金貨であり、一分銀ではない。一分銀は 1837 年に初めて発行された。］である。ここで、OED の利用者は初めて「一分」には金貨と銀貨とがあり、元は金貨のほうであったことに気付く。このような情報は定義の部分にこそ欲しいものであり、例文を一々検討しない利用者もいることを考えると、極めて不親切であると言わざるを得ない。

OED はまた、多くの異形を載せている。17 世紀には“ichebo, ichibo”の異形が、19 世紀には“itsi-, itzi-, -bu, -bou, -bue, -boo”などの異形があると記載されている。加えて、定義の下方に小字で「現在でも、ドルや円の 4 分の 1 を指すために用いられることがある。「1 分」の意味であるため、複数の「分」の意味で複数形を用いるのは誤用である。」との註釈が付いている。

『日本誌』では、「小判」と共に、旅行記の部分に多く登場する語である。“An *Itzebo* is a square gold coin, worth about one of our ducats, and a fourth part, (or about twelve or thirteen shillings English.)”［一分は四角い金貨であり、1.25 独ダカット（12～13 英シリング）とほぼ等価である。］のように、ドイツの通貨との対応関係も示されている。OED の換算と随分と違っているのは、OED が万延期の一分銀での換算レートを掲載しているからであろう。

３・13　Jamatto (Yamato)

大和。日本国の異名・雅名、また、旧国名で現在の奈良県にあたる。原則的には固有名詞を採録しないことになっている OED にこの語が現れているのは、これを「語の構成要素」として見ており、固有名詞そのものとしては扱っていないからである。つまり、Yamato という見出しの下に、「大和絵（大和流）」と「大和魂」との 2 つの語が掲載されているのである。*Suppl. 2* に採録され、以降の変更はない。

まず、第 1 義として記載されている「大和絵（大和流）」である。この語義には「12 世紀から 13 世紀にかけて全盛を迎えた日本における美術の流派で、（中国様式ではなく）明らかに日本の様式で、日本的な題材を扱ったもの。通常は Yamato-e (†-we)や Yamato-ryū の形で使われる」とある。ダガーマーク（†）は、その用法または綴りが古いもので、今では使われていないことを示すものである。ここでは、「絵」が旧仮名遣い及び古い発音では「エ」ではなく「ヱ」であったことの現れであろう。この語義での用例は 7 例で、初出は“**1879** *Trans. Asiatic Soc. Japan* VII. 345 Motomitsu is spoken of as the originator of the *Yamato-we*.”［基光が大和絵の創始者と言われている。］である。

第 2 義として「大和魂」が載っているが、こちらは至って簡単な記述しかない。“***Yamato-damashii***: the Japanese spirit.”とあるだけである。この語義での用例は 3 例で、初

例は“**1942** *R.A.F. Jrnl.* 13 June 6/2 He will be filled with what is called *yamato damashi* [sic] or the pure spirit of Japan.”［彼の胸は所謂大和魂、つまり、純粋な日本精神で満たされるであろう。］となっている。ここで、出典情報の読み方を復習しておくと、この例の場合、「1942 年の *R.A.F. Journal*（6 月 13 日付）の 6 ページ 2 段目」ということになる。

『日本誌』においては、日本の地方名を一覧にしている部分で旧国名の一つとして、また、紀行文中にも通過したり滞在したりした場所の説明の中に数多く出てくる地名である。また、“This Empire is by the Europeans call’d *Japan*. The Natives give it several names and characters. [. . .]. *Jamatto*, which name is also given to one of its Provinces.”（省略は筆者による）［この王朝はヨーロッパでは Japan と呼ばれている。現地の人々には色々な文字で書かれる様々な呼び方がされている。大和とも呼ばれ、これは、一地方名にもなっている。］との記述も見られる。

３・14　Jedo (Yeddo)

江戸。江戸時代には幕府の本拠地であり、明治元年（1868 年）7 月に東京と改称され、翌年には帝都とされた。江戸時代の末期には、人口が 100 万人を超えていたという。OED には *Suppl 2.* で採録され、「東京（改称された 1868 年以前）の旧名で、Yeddo crepe, poplin や Yeddo spruce のように、その地に由来する物などを指すのに限定用法で使われる。Yeddo spruce は日本のトウヒで、学名 *Picea jezoensis*」とある。

Yeddo crepe は、通常は江戸縮と訳されているが、これは実は銚子縮のことである。江戸時代に隆盛を極め、利根川を高瀬舟に積まれて江戸まで運ばれ、さらに横浜からイギリスへと輸出されていたが、明治末期には衰退したという（東京成徳英語研究会 2004: 548）。江戸の問屋を経由して輸出されていたため、ヨーロッパでは江戸のものと認識されたものであろう。なお、千葉県のウェブページによれば、銚子縮は 2001 年 3 月に「県指定無形文化財」の指定を受けている。Yeddo poplin のほうの詳細はよくわからないが、こちらも高級織物の名前だという（*ibid.*）。これらの 2 語にはダガーマークが付いており、共に廃語となっていることを示している。

Yeddo spruce に関しては OED の完全な誤認であり、江戸とは何の関係もない。*Picea jezoensis* はエゾマツの学名であり、日本地理に明るくない者にとっては無理もないことだが、江戸と蝦夷とを混同したものである。但し、OED ばかりに非があるわけではなく、ガーデニングに関する本や植物学の百科事典などでも Yeddo spruce となっているなど、多くの文献において混同されていることが用例の観察によってわかる。

OED の用例は 6 例あり、そのうち 4 例が Yeddo spruce で、Yeddo poplin が 1 例、残りの 1 例は Yeddo crepe と Yeddo poplin とが両方出ている。初出例は“**1866** in A. Adburgham *Shops & Shopping* (1964) xii. 126 Costumes at reduced prices in Yeddo Poplin.”［値下げした江戸ポプリンの洋服］となっている。この変則的な出典情報は、「A. Adburgham が 1964 年に *Shops and Shopping* 第 12 節 126 ページに書いたものから、1866 年に関する部分」からの引用ということである。

Yeddo spruce の初出は、参考例になっており、これは正しく Yezo spruce となっているが、その他の用例は全て Yeddo になっている。“**1906** Elwes & Henry *Trees Gr. Brit. & Ireland* 87 Mayr informed me last year that the Yezo spruce was not introduced into Europe until 1891.”［マイヤーは去年、エゾマツは 1891 年以前にはヨーロッパになかったと教えてくれた。］

『日本誌』での使用は、その全てが地名としての江戸である。日本の地理・社会・行政の説明に現れることは、幕府の本拠地であるので全く不思議でない。また、旅行記の部分においても、最終目的地であるわけであるから、出てこない筈がない。こういうわけで、地名としての江戸は何十回も出現する頻出単語である。その中から代表例を選ぶというのは非常に難しいので、ここに例を挙げることは控えたいと思う。

３・15　Jetta (Eta, eta)

穢多。「非人」と共に、封建時代の主要な賤民身分である。江戸時代には士農工商の身分制からも外された最底辺の身分の一つとして確立し、固定化された。職業、住居、交際など多くの面において差別され、現在の住民票にも相当する宗門改帳も別帳が作成されていた。法的には「解放令」（明治 4 年太政官布告第 448 号）により廃止されたものの、その後も被差別部落の問題として依然として問題が残されている。

OED の定義には「日本において蔑視される階級の者。集合的、限定的にも使われる」とある。*Suppl. 2* から採録され、用例は 8 例が挙げられている。その初出例は“**1897** A. M. Knapp *Feudal & Modern Japan* I. v. 173 The cause of the intense repulsion and contempt with which the Japanese have regarded the *eta* class is unknown.”［日本人が強い嫌悪と反感を持って穢多という階級を見てきた訳はわからない。］である。この例文は、1727 年の『日本誌』よりもだいぶ新しいものである。

『日本誌』に出現する 2 つの例は、長崎の状況を述べて

いる場面に見られる。1 例目は“They call them by the scandalous name of *Katsuwa*, which signifies the very worst sort of Rabble, and put them upon the same foot with the *Jetta*, or *Leather-Tanners*, the most infamous sort of people in their opinion, who are oblig'd in this country to do the office of publick Executioners, and to live out of the town, in a separate village, not far from the place of Execution.”［長崎の人々は彼らを轡という陰口めいた名で呼び、この名は最も酷い暴徒の意味である。轡は穢多（革なめし屋）と同類とされる。穢多は日本人にとっては最も蔑視されるべき人々であり、この国では公開処刑執行人の任にあたるべき者とされる。彼らは、市街地の外にある別の村で、処刑場からそれほど遠くない所に住まわされている。］である。

2 例目は“But no profession is so much despis'd by the Japanese, as that of the *Jetta*, or *Tanners*, whose business it is to skin the dead cattle, to dress and tann leather for shoes, slippers, and the like.”［穢多（なめし屋）ほど日本人に軽蔑され、嫌われている職業はない。穢多の仕事は死んだ牛の皮を剥ぎ、履物等のために革をなめすことである。］となっている。このように、『日本誌』の 2 例を見ると、穢多についての情報を OED よりも細かく知ることができてしまうのである。

３・16　Kaja, Kai (kaya)

榧。イチイ科カヤ属の常緑針葉樹である。日本と朝鮮半島との暖帯自然林に散生し、北限は群馬県や福島県のあたりである。材木は淡黄色で光沢があり、特有の芳香を放つ。加工のしやすさや美しさから彫刻などの工芸品に用いられ、碁盤や将棋盤なども有名である。特に宮崎県日向地方や奈良県春日山産の材が良いとされている。種子は食用にすることができ、果実から取れる油は食用や灯火用に使われる。

OED では *Suppl. 2* から登場する語であり、「油脂を含む大きな種子を持つ日本産のイチイ科の針葉樹で、学名 *Torreya nucifera*。また、その材木」とされている。例文は、参考例となっている初出例を含め、6 例が挙げられている。

その初出例は、今回見ている『日本誌』より、第 1 部第 1 章第 9 節の 119 ページにある例である。“**1727** J. G. Scheuchzer tr. *Kæmpfer's Hist. Japan* I. i. ix. 119 Of all the Oils express'd out of the seeds of these several plants, only that of the *Sesamum* and *Kai*, are made use of in the kitchen.”［これらの数々の植物の種子から搾り出される全ての油のうち、食用に供されるのはゴマの油とカヤの油だけである。］OED がこの例文を参考例としたのは、綴りが少し違うためであろうか。

ところで、この kaja も例外ではないが、『日本誌』では現在の標準ローマ字では y を書くところに j を用いていることが多い。これは、元来 j がヤ行音の子音を表す文字であったことからしても頷けることである。実際、多くのヨーロッパ言語では今でもそうであるし、国際音声記号（International Phonetic Alphabet）では「硬口蓋接近音」として/j/を設けており、これは英語のアルファベットの J ではなく Y に相当する音である。この国際音声記号というのは、用途によって簡略化はされているものの、多くの辞書に採用されている発音表記でもあるから、ご存知の方も多いだろう。

３・17　Kaki (kaki)

柿。カキノキ科カキノキ属の落葉高木である。中国原産で、古くから栽培され、品種は非常に多い。富有柿、次郎柿、筆柿、蜂屋柿などは代表的な栽培品種である。材木は堅く、家具や工芸品に使われる。熟した果実は食用とされ、葉は加工して茶のように抽出したものが飲用とされる。柿渋は防腐剤や塗料として用いられ、また、紙に塗ると耐水性を持たせることができる。和傘に渋紙が用いられるのはこのためである。さらに、殺菌効果もあるとされ、柿の葉寿司などに用いられている。ところで、「柿（こけら）」は似て非なる字であるから、漢字で読み書きする際には注意を要す。

OED には初版から採録されており、「中国のマメガキまたは日本のカキ。学名 *Diospyros Kaki*」とある。用例は 2 例が挙げられていた。その後、*Suppl. 2* において用例が追加され、第 2 版でも追加があったという。最終的には 13 例になっている。語義は第 2 版においてもそのまま継承されている。

第 2 版における初出例は“**1727** J. G. Scheuchzer tr. *Kæmpfer's Hist. Japan* I. i. 116 There are three different sorts of Fig-trees growing in Japan. One is call'd *Kaki*, if otherwise it may be called a Fig-tree, it differing from it in several particulars.”［日本には 3 種の異なるイチジクの木が生育している。1 つ目はカキと呼ばれているが、もしそうでなければイチジクと呼んでも良いかも知れない。カキとイチジクとは幾つかの細かい点で違ってはいるのだが。］である。

東京成徳英語研究会（2004: 120）によると、イチジクが日本に伝えられた時、「蓬萊柿」の名が与えられた。このことにより、カキに馴染みがなかったヨーロッパ人が、同じ文字を含むイチジクと同種であると勘違いしたのも無理がないことであろう。どちらかと言えば馴染みのあったイチジクを中心に、カキのことについて記述しているの

である。ちなみに、前の例にある 3 種というのは、甘柿・渋柿・イチジクであろう。

３・18　Kami, Cami, Came (kami)

神・守・上。この語は他のものと違い、かなり複雑な様相を帯びている。というのも、日本語で「カミ」と発音される複数の語が混同されているのである。まず、氏神、神棚、祭などに関連した神道における「カミ」。また、上司のことやその上官、権威者としての将軍や天皇を「お上」と称することがあるが、この「カミ」もここに混同されている。

そして、四等官制における長官（かみ）・次官（すけ）・判官（じょう）・主典（さかん）の一つとしての「カミ」。これは、任官された官職によって「卿」「大夫」「頭」「正」「尹」「督」「帥」「守」等の文字で表されるが、いずれも「カミ」と読み、越前守や主殿頭などのように使われる。さらに、旅館や料理店の「女将」というのがこれに加わると、もう何が何だかわからなくなってくる。幾重にも意味が重なり合い、音も同じであるこれらの「（オ）カミ」に直面した時、西洋人の困惑はどれ程であったか、想像することは容易である。

OED には初版から見られる語である。大幅な用例の追加が *Suppl. 2* において行われている。第 2 版では、初版の内容に *Suppl. 2* の内容を加えて再編しているのであるが、その再編の仕方は混乱そのものである。語義にしても、用例にしても、この語に関しては全てにおいて混沌としている。ここで紙面を割いて紹介することはしないが、このことについては、東京成徳英語研究会（2004: 125–128）に詳しい。

OED では、2 つの定義が記載されているが、上述の通り、混乱が見られる。第 1 義が「日本人により大名や領主に与えられた称号。『卿』。また、神棚に関しては *god-shelf* s.v. GOD *n.* 16a を参照」であり、第 2 義は「日本の神道や土着宗教における神性。（プロテスタントの宣教師やその信徒によって使われる、絶対神を指す用語としての）神。また、限定的に kami-religion の用法も」とある。神棚の「カミ」は、定義としては第 2 義が適当であるし、OED も god と関連づけているにもかかわらず第 1 義の中に載っている。

第 1 義の初出例は“**1616** R. COCKS *Diary* (1883) I. 131 Micarna Camme Samme, the Emperours sonns sonne.”［将軍の息子の息子である三河守様。］である。ここで Micarna というのは Micawa の誤植であろう。また、第 2 義の初出例は“**1727** SCHEUCHZER tr. *Kæmpfer's Japan* I. 206 Superstition at last was carried so far, that the Mikaddo's..are looked upon..as true and living images of their *Kami's* or Gods, as *Kami's* themselves.”［迷信の行き着いたところ、遂には帝の姿が彼らの神の真にして生ける姿、さらには神そのものの姿と見做されるまでになった。］となっている。但し、2 つの定義の間に混乱があることには注意が必要である。

３・19　Kanno, Canna (kana)

仮名。漢字をもとにして日本で作られた音節文字で、一般的には平仮名と片仮名とを指す。平仮名は漢字の草書体から派生し、片仮名は漢字の一部や画数の少ない漢字から作られたものである。明治以前には多くの字体が存在したが、「小学校令施行規則」（明治 33 年文部省令第 14 号）第一号表に標準字体が示され、現在ではこれらの字体のみが使われている。ちなみに、この第一号表は「小学校令施行規則中改正」（明治 41 年文部省令第 26 号）によって削除されたが、その改正の趣旨は「明治 41 年文部省訓令第 10 号」に「假名ハ大體ニ於テ從來ノ規定ニ依ルヲ適當ト認ムルモ尚普通ニ行ハルヽ變體假名ヲ加ヘ授クルノ必要アリ漢字ノ數モ亦義務教育延長ノ結果相當ノ増加ヲ要ス是レ假名及其ノ字體竝ニ漢字ニ關スル規定ヲ削除シタル所以ナリ」とある。

OED には *Suppl. 1* から採録されており、「日本語の音節文字。主だった種類には、平仮名と片仮名とがある」とある。用例は 9 例が載っており、その初出例と第 2 例が『日本誌』からである。初出例は“**1727** J. G. SCHEUCHZER tr. *Kæmpfer's Hist. Japan* I. I. iv. 68 The Names of the Provinces..are only in their *Canna*, or common Writing.”［藩名は通常表記である彼らの仮名でしか書かれていない。］で、2 例目は“*Ibid.* IV. iv. 305 Publish'd in the vulgar characters, call'd *Kanno*.”［仮名と呼ばれる大衆文字で出版されている。］となっている。

３・20　Katanna (katana)

刀。太刀、打刀、脇差、短刀などの日本刀の総称であるが、普通は打刀を指す。刃渡り 30 センチメートルまでのものを短刀、60 センチメートルまでのものを脇差、それ以上のものを打刀や太刀と呼ぶらしい。打刀は刃を上向に腰に差し、太刀は刃を下向きに腰に吊る。江戸時代の武士が差すのは通常、打刀（狭義の刀）と脇差である。

OED には *Suppl. 2* に採録されており、「日本の侍の、長い片刃の剣」となっている。用例は 7 例で、初出は“**1613** J. SARIS *Jrnl.* 11 June in *Voy. Japan* (1900) 79 Either of them had two Cattans or swords of that Countrey by his side.”［彼らはどちらも 2 本の刀、つまりその国の剣を腰に差していた。］である。

『日本誌』では 1 ヶ所にのみ見られる。“*Wakisasi*, a

Scimeter of *Fudo*, which they wear stuck in their Girdle on the left side.　It is somewhat shorter than a *Katanna*, and kept in a flat sheath.”［脇差は不動明王の短刀であるが、彼らはこれを帯の左側に差し込んで身に付ける。刀よりは幾分短く、平たい鞘に収められている。］とある。これは、山伏の装備品の説明の一部のようである。

３・21　Katsuwo (katsuo)

鰹。サバ科カツオ属の大型肉食魚である。全世界の熱帯・温帯に広く分布し、透明度の高い外洋を好む。日本近海では黒潮に沿って春に北上し、秋に南下するという回遊を行う。漁獲方法としては一本釣が有名で、鮮魚として食用にされる他、鰹節や罐詰にも多く用いられる。

OED には *Suppl. 2* に初登場し、第 2 版にもそのまま引き継がれているという。「カツオ。学名 *Katsuwonus pelamis*。生にせよ、乾物にせよ、日本では重要な食用魚である」とある。また、派生語として katsuobushi「この魚を干して 4 分の 1 にしたもの」が挙がっている。

載っている用例は 6 つある。初出例は『日本誌』より、第 1 部第 1 章 136 ページの“The best sort of *Katsuwo* fish is caught about Gotho.”［カツオの上物は五島の付近で獲れる。］である。『日本誌』の綴りに w が入っているのは、歴史的仮名遣いにおいては「かつを」であったことからも理解できる。『日本誌』で使われているのは、この 1 回限りである。

３・22　Kattakanna, Catta Cana (katakana)

片仮名。日本語の表記に用いられる音節文字の一種である。漢字の一部を採ったり、画数の少ないものはそのまま用いたりすることにより作られた。学僧が漢文を訓読するため、訓点として付したものに始まると言われる。元は多くの異字体があったが、「平仮名」「仮名」の項でも触れた通り、「小学校令施行規則」（明治 33 年文部省令第 14 号）第一号表に標準的な字体が示され、現在では専ら一音一字の原則に従ったこの字体のみが使われている。戦前の日本では、学問的傾向の強い正式な仮名とみなされ、公文書に用いられた。初等教育においても平仮名に先行して教えられていた。

OED では *Suppl. 1* から採録され、「日本語の音節文字の 2 種のうちの 1 つ。平仮名よりも角張った形態をしており、対応する音を持つ中国語の表意文字の省略形に由来する。主に科学的な文章や公用文で使用され、また、日本語に借入された外国語を表記するのに用いられる。平仮名の項も参照」とある。「中国語の表意文字」というのは、ここでも漢字のことである。「科学的文章や公的文書」というのは、戦前には当てはまったのだろうが、現状ではやや古い記述と言わざるを得ない。現在では、もっとも形式ばった法律文でさえも、片仮名ではなく平仮名が用いられているのである。

異綴りとして kattakanna と katagana とが挙げられている。前者は『日本誌』の綴りである。後者は、日本語では本来ありえない筈の音形であると思われるが、引用元は如何なる文献であろうか。用例は 8 例あり、初出例は“**1727** J. G. Scheuchzer tr. *Kæmpfer's Hist. Japan* II. v. xiv. 590 The other was a map of the whole world, of their own making, in an oval form, and mark'd with the Japanese *Kattakanna* characters.”［もう 1 つは、全世界の地図であったが、これは彼らの手作りであった。楕円形で、日本語の片仮名で表示されていた。］である。『日本誌』にはこの他に、日本の文字を図示した図版の説明に見られる。

なお、この語は前出の hiragana と共に OALD[8] に載っており、katakana “a set of symbols used in Japanese writing, used especially to write foreign words or to represent noises”とある。

４．その他の語の一覧

紙面に限りがあり、今回は双方に現れる語の全ては紹介しきれなかったので、取り上げられなかったものを以下に一覧しておく。括弧の外が『日本誌』の綴り、中が OED の綴り、それに続いて対応する日本語である。

23. *Kin, Ikin* (*ken*) 間
24. *Kiri* (*kiri*) 桐
25. *Kirin* (*kirin*) 麒麟
26. *Koi* (*koi*) 鯉
27. *Koitsjaa* (*koi-cha*) 濃茶
28. *Kokf*, *Koku* (*koku*) 石
29. *Konjakf* (*koniak*, *koniaku*) 蒟蒻
30. *Kuge* (*Kuge*) 公家
31. *Matsuri*, *Matsusi* (*matsuri*) 祭
32. *Midsu* (*miso*) 味噌
33. *Mikaddo*, *Mikaddi* (*Mikado*) 帝
34. *Mome*, *Momi* (*momme*) 匁
35. *Moxa* (*moxa*) 艾
36. *Nipon*, *Nifon* (*Nippon*) 日本
37. *Norimon* (*norimon*) 乗物
38. *Obani*, *Ubang* (*obang*) 大判
39. *Rinsaifa* (*Rinzai*) 臨済宗
40. *Rissiu* (*Risshu*) 律宗
41. *Rit* (*Ritsu*) 律宗
42. *Riuku*, *Liquejo*, *Liquæo*, *Leuconiæ* (*Ryukyu*) 琉球

43. *Liqueans*, *Liquejans* (*Ryukyuan*) 琉球人
44. *Saquer* (*sakura*) 桜
45. *Sake*, *Sackee*, *Saki*, *Sakki*, *Sacki*, *Sacci* (*saké*) 酒
46. *Samurai* (*samurai*) 侍
47. *Sasanqua* (*sasanqua*) 山茶花
48. *Sasen* (*zazen*) 坐禅
49. *Satori* (*satori*) 悟
50. *Sen* (*Zen*) 禅
51. *Senni* (*seni*) 銭
52. *Sennin* (*sennin*) 仙人
53. *Seogun* (*shogun*) 将軍
54. *Siakf*, *Sak*, *Saku*, *Sakf*, *Sackf* (*shaku*) 尺
55. *Singon* (*Shingon*) 真言宗
56. *Sinto*, *Shinto* (*Shinto*) 神道
57. *Sintoist* (*Shintoist*) 神道者
58. *Siodo* (*Jōdo*) 浄土宗
59. *Soeju*, *Soje*, *Soja* (*shoyu*, *shoya*, *soy*, *soya*) 醤油
60. *Sotofa*, *Sotosju* (*Soto*) 曹洞宗
61. *Sugi*, *Suggi* (*sugi*) 杉
62. *Sun*, *Sum* (*sun*) 寸
63. *Tai*, *Tah* (*tai*) 鯛
64. *Tanabatta*, *Tannabatta* (*Tanabata*) 七夕
65. *Tendai*, *Ten Dai* (*Tendai*) 天台宗
66. *Tokko* (*toko*) 床
67. *Torij*, *Tori*, *Toori* (*torii*) 鳥居
68. *Tsja*, *Tsjaa* (*cha*, *chia*) 茶
69. *Tsubo* (*tsubo*) 坪
70. *Tuffon* (*typhoon*) 台風
71. *Udsigami* (*ujigami*) 氏神
72. *Urusi* (*urushi*) 漆
73. *Uta* (*uta*) 歌
74. *Wakisasi* (*wacadash*) 脇差

５．まとめ

ここまで、『日本誌』と OED との双方に出現する日本語を見てきた。文化に関する語が多くあったように思われる。『日本誌』よりも OED の初出年が新しいものも中には見られ、現在進行中の改訂作業において改められることが望まれる。また、今回紹介しきれなかった語については、機会が与えられれば順次、本稿の形式に従って説明・解説を加えていくつもりである。

なお、本稿中、百科事典的な事項は『ブリタニカ国際大百科事典』（1988）の情報を援用している。また、OED の版による変遷は 東京成徳英語研究会（2004）からの情報によっていることをここに付記しておく。　（続）

参照文献

Berg, D. L. (1993) *A Guide to The Oxford English Dictionary.* Oxford: Oxford University Press.

『ブリタニカ国際大百科事典』(1988) 第 2 版.「小項目辞典」全 6 巻. 東京: ティビーエス・ブリタニカ.

土居 峻 (2008)「*The Oxford English Dictionary* における全日本語借用語：非見出し語も含めた検索の試み」.『英語コーパス研究』15: 107–116.

Doi, S. (2010) 'Japanese Loanwords in *the Oxford English Dictionary* and in the English version of Kæmpfer's *the History of Japan*'. In T. Fujita, S. Suzuki, & N. Matsukura (Eds.), *The Future of English Studies* (pp. 84–99). Tokyo: DTP Press.（邦題『英語と英語教育の眺望』）

エバンズ・M・年恵 (1990)『英語になった日本語：ことばにみる最新アメリカ事情』. 東京: ジャパン タイムズ.

早川 勇 (2003)「ケンペルの使った日本語語彙」.『愛知大学 言語と文化』8: 119–147.

早川 勇 (2007)『英語のなかの日本語語彙：英語と日本文化との出会い』. 再版. 東京: 辞游社.

Kæmpfer, E. (1728) *The History of Japan* (J. G. Scheuchzer, Trans. & Ed.). 2nd impression. 2 vols. London. (Facsimile reprint published in 1977, Tokyo: Yushodo Booksellers)

加藤 秀俊・熊倉 功夫 (編) (1999)『外国語になった日本語の辞典』. 東京: 岩波書店.

大和田 栄 (1995)「OED に見られる日本語：資料と分析」.『東京成徳短期大学紀要』28: 77–103.

大和田 栄 (1997)「*OED* に見られる日本語(3)：*OED* の中のケンペル」.『東京成徳短期大学紀要』30: 27–35.

[OALD[8]] *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (2010) 8th ed. Oxford: Oxford University Press.

The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM (2002) Version 3.0 for Windows. Oxford: Oxford University Press.

Serjeantson, M. S. (1935) *A History of Foreign Words in English.* London: Routledge & Kegan Paul.

東京成徳英語研究会 (編) (2003)『西洋の日本発見：*OED Additions Series* に見られる日本語』. 東京: 東京成徳短期大学.

東京成徳英語研究会 (2004)『OED の日本語 378』. 東京: 論創社.

(受理　平成 23 年 3 月 19 日)